沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.41 No.3（通巻212号）

2016.12.25（年4回発行）

二重廻し

二重廻し（毛皮の襟付き）

中折れ帽子

二重廻しの背面

二重廻し姿の男性と羽織姿の女性（昭和初期の絵葉書より）

中央と左奥の男性が二重廻しを着ている（大正時代の絵葉書より）

女性用コート

寄贈資料の中から　外套（がいとう）

今回は、資料の中から防寒用の外套を紹介します。

雨具としての外套には、蓑（みの）やポルトガル伝来の合羽があげられますが、防寒具としての外套の歴史は、幕末から明治にかけて、軍隊や官吏などに洋装が導入されてから始まります。洋装店もあいついで開業しましたが、この頃の洋服は制服など公的の場での着用が大半で、私生活では和服で過ごすのが一般的でした。

庶民の間では、洋服の普及に先立ち断髪が促進された後、和服に洋装を取り入れることが盛んに行われました。明治時代の初めには、トンビと呼ばれる外套や、マントのようなものが流行しています。その後、二重廻（まわ）しという、袖なしのコートにケープがついたものが登場しました。これは後にインバネスとも呼ばれ、スコットランド北西部のインバネスが発祥地とされます。二重廻しは何度か意匠が変化し、和服用の外套として好評を博しました。誂（あつら）えるには高額な費用を必要としたにもかかわらず、流行は大正時代末まで続き、昭和時代に入っても着用されましたが、日常着としての洋服の普及に伴い姿を消していきました。

中折れ帽子は二重廻しと合わせてよく用いられました。これはフェルト製で、天井に溝のようにへこみをつけたものです。帽子は、断髪をした男性の間で流行し、和服にも洋服にも欠かさず用いられました。他に山高帽子や鳥打帽子など、様々な帽子が普及しました。

女性の防寒具には以前から襟巻がありましたが、外套はなく、明治時代半ばに外国からショールが伝わり流行しました。また、羽織の着用が一般に広まりました。女性の日常着は大正時代末まで和服が大半で、吾妻（あづま）コートが繰り返し流行しました。写真のコートは終戦以降のもので、洋服地でつくられた和服用外套です。

駿河湾の漁

金指　貢さんの漁話

網組長宝組の漁法（２）マカセ網

• マカセ網（前号の続き）

マグロやカツオは早い年で５月頃にやってきます。それから８月の半ば頃までを中心にマカセ網での漁が行われます。もちろん、これらの時期以外でもマグロが来たとなれば、マカセ網を船に積んでマグロを捕りに行きます。

戸田口から松崎町の沖ぐらいまでを主な漁場としていました。夏場の頃であれば朝の２時ごろから戸田へと向かいます。途中、西浦久料の若松崎に立ち寄り石を拾います。戸田に到着すると船上で朝飯を食べますが、その前にマグロを発見すれば朝飯を食べずにマカセ網の準備に取り掛かります。昼飯も同様船上で食べることになりますが、漁を優先とするので決まった時間にご飯が食べられるとは限りません。お弁当にご飯を目一杯詰めたメンパ（お櫃形の弁当箱）とおかずを入れたアルミの四角い弁当箱を持って行き、朝と昼にそれぞれ半分ずつ食べます。おかずは前日に捕れたマグロの照り焼きやナスのコーコ（お新香）や金山寺味噌などでした。また、漁があれば捕った魚をその場で刺身にしておかずにしてしまいます。２～３回の漁を行い、暗くなる前には港へ戻ります。

マカセ網を行う時の船隊は､網を積んだアンブネ(網船）が２艘、それぞれのアンブネを曳航するハツドウキ（動力運搬船）が２艘、そして、魚群を探索するテブネ（探索船）が２艘という構成になります。アンブネには20名ほど、ハツドウキには４名ほど、テブネには３名ほどの漁師が乗り込むことになるので、総勢で50名以上の漁師でマカセ網を行っていました。

マカセ網はハツドウキに曳航されたアンブネが一組ずつ二手に分かれて網を広げていき、マグロの群れが泳いでくる方向に向かって網を曳いてフクロ（袋網）で捕える漁法になります（前号の図２参照)。テブネがハツドウキよりも先の方でマグロの群れを探索します。マグロの群れが海面を騒がしく泳いでくることは珍しく、ほとんどは目で確認することができません。そのため、漁師は鳥に注目します。マグロの群れには必ずカモメがついてくるので、カモメの動きによってマグロの群れがどの方向へ動いているのかを判断します。テブネの漁師がマグロの群れがいると判断し、マグロの群れからアンブネとの距離が１km ぐらいの地点になると網を準備するよう伝えます。今であれば無線で詳しい状況を言葉で伝えることができますが、無線がなかった当時は赤い旗を立てることでアンブネに伝えました。赤い旗を確認したアンブネは網を海に落として広げていきます。マグロが目に見えるぐらいの距離になった時点で網を半分ぐらいは広げておかないとマグロに網の下をくぐられて逃げられてしまいます。網を準備するように伝えたテブネは戻ってきて、広がった網を巡りながら絡まっていないかを確認していきます｡網が広がりきるまで30分の勝負となります。マグロが泳いでくる方向はマグロ次第なところがありますが、マグロはこちらが慌てず静かにしていればまっすぐ泳いでくる魚です。慌ててハツドウキが向かう方向をあちこちと動かすとマグロに警戒されてしまい逃げられる可能性が高くなります。

マグロの群れがマカセ網の中に入ると網に沿って回るように泳ぎます。そして、ハツドウキがアンブネを曳航しつつ、アンブネの漁師は顔を真っ赤にさせながら一生懸命網を曳き揚げていきます。網の釣り合いをとるために、双方のアンブネの漁師がお互いのナアミのアンバ（浮子）に書かれた番号を確認して「おら、八番があがったどー、おめーたちはどうだー」と声を掛け合います。この時にマグロが網の外へ逃げないようにするために使うのが漁場へ向かう途中で拾った石です。この石を海へ向かって投げ入れて脅し、マグロの群れがフクロの方へ向かうように誘導します｡｢ヨーイッショ、ヨーイッショ」と双方のアンブネから網を揚げる時の声の掛け合いが漁場に響き渡ります。徐々にフクロに近づくにつれてマグロがいることが分かってくると自然と声も大きくなっていきます。そして、やる気も湧いてきて１時間半で網を揚げ終えます。しかし、カラであることが分かるとやる気を失い、網を揚げ終えるまで３時間もかかってしまいます。たくさんのマグロが捕れればソウバタと言って船に積んである全ての大漁旗を船に立てて港に戻ります。

長宝組では色々な漁法で魚を捕らえてきましたが、マカセ網でマグロがナアミに当たってフクロに入っていく瞬間は他の漁法では感じることができないほど漁師として一番幸せな時間でした。

（話：金指 貢氏　昭和５年生まれ　沼津市三津在住）

写真１：長宝組がマカセ網で使用したアンバ
長547mm×幅310mm×厚47mm
（沼津市歴史民俗資料館所蔵）

三浦点描③　岡部長景と東瀛荘３

別荘の水道整備の詳細について『岡部長景日記』(尚友倶楽部編1993柏書房)の記録から見てみる。別荘の売買契約から約１月後の昭和４年５月26日の条に「…吾々は水源地から杉林の方を見分に行った。水源地には立派なタンクが出来て居る。将来は此処から水を引くのがよかろう。悦子の如くはランニングウオーターのない家に住んだことがないから水汲みに水を担わせるなどは感服していらぬので、水引き込みには大賛成。…」とあり、当初は三津の水源地から水道を引くことを計画していたが、その後に長浜に移住した清水氏を窓口にして長浜区と交渉を進めることとなったようである。長浜区の交渉当事者は、大川忠助翁、高梨区長ほかで、昭和４年８月26日の条に「…清水先生来訪されて、昨夜長浜の有志より愈々水を供給することに相談纏りたる旨の返答あり。田用水として七百五十石位の貯水池を作り、飲用水は別に小さい貯を作ることとし、村の者は四百円位の負担すべしといふことに相談成りたる趣なり。…」、「…それから四人の案内で水源を検分に行き、此辺に飲料水の貯池、此辺に田の用水の貯水池を設くるなど説明あり。…」とある。

清水氏の尽力により長浜区との交渉がまとまり、区が四百円を負担して長浜の水揚げ場に水田用水と飲料水用の貯水池を設けることで交渉が成立した。

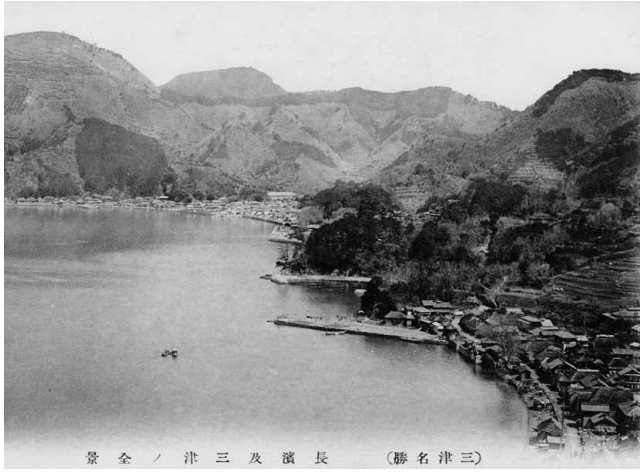
10月19日の条には「…九時清水先生来訪、三津よりの返事をもたらされた。それによれば鉄管埋設図もあり飲料水タンクもコンクリートにて作ることに設計され、大体要領を得た。…」と記されている。

翌昭和５年７月28日の条には、「…殊に水道が出来上がって居るから清水が出て、便所を改造したので臭気なく、昨年とは一段と気持がよい。…」、「翌二十九日は朝から水源地を見に行き、庭を廻って雑草刈等をやった。…」とあり、この時点では完成しているようであるが、８月３日の条には、「…五人にて水源地の貯水槽工事視察に出掛けた。鉄管布設の畔を進み、用水槽を先ず視てり、更に上りて飲料水槽に到る。六尺に九尺位のコンクリート槽にて、トタンの屋根をつけ、別荘用の管は最下位に取付ありて将来減水のときも心配なきのものの如し。それより清水の湧く取込口に至る。老杉鬱蒼たる谷間にて、水も冷たく清冽なり。蓋し最良の飲料水であろう。先ずこれで水の問題は解決を遂げた。清水先生の斡旋は誠に忘れることはできない。それから帰邸して給水の契約案につき打合せをなし、大体の成案を得て三氏は辞去された。…」とあり、まだ工事中ともとれる。別荘に引きこむ水道は、谷間の湧水を引きこんだ1.8×2.7mのコンクリート製の貯水槽に一旦溜め、そこから田んぼの畔に敷設した鉄管で送水したことがわかる。

同日の記事には、「四日は早朝より六人の人夫来り、石を担ぎ上げ、放水泉の築造に終日かかり、夕方帰京の予定を変更して日暮れまでかかって大体纏りを付けた。何しろ山の背に水を湧かせようといふのだから、兎角不自然に見えて六ケ敷、苔でも羊歯類を植え、落付かせて見ないと感じが得られない。急がず晩成を期するの外ない。…」とあり、引きこんだ水道を使って山の背に噴水を設置するのに苦労している。

その後の昭和５年９月２日の条には、「…一方水道管は、従来山よりの管を一旦タンクに導き、台所流、湯殿流等はそれより引き、泉の方へはタンクの剰余を放水することにしてあったのだが、今後常に放水することとせばタンクに故障あると水があふれる虞あるから、寧ろ山よりの管と放水、配水の管とを直接に連結し、放水の管丈を小さく開き置けばタンク破損の憂もなくなるゆへ、急に思いつき昨日鉄管屋を呼びて命じ、今早朝より工事にかかり、三時出発頃には大半出来上がり、残部は松濤館に頼んで置いた。…」とあるなど改修にも努めている。

なお、長浜から水を引くことは、往年の高田商会の高田氏の所有時に交渉があったが、折り合いが付かず成立に至らなかったことも記されている。



長浜から見た二又　中央の岬に東瀛荘がある。右に棚田

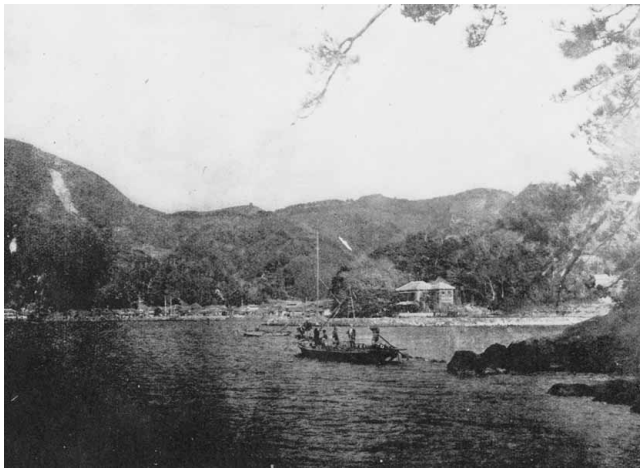
三津久伏の海水浴場　後方の岬に東瀛荘、麓に松濤館

魚見のある風景⑭　三津久伏

右の写真は、大正三年刊行の勝間田泰平著『伊豆鑑』に収録されている「内浦村三津海岸」の写真です。中央には５人が乗込んだ和船が、岬の先端の船着場から漕ぎ出されています。船釣りにでも出かけるのでしょうか。その後方には、埋立地に洋館が建っています。解説では三津ホテルとあり、外国人が多く宿泊すると記されています。またこの地は海水浴が盛んで、三島・長岡・古奈からの来客が多いとも述べられています。

故石井種生氏の調査によれば、長岡方面と結ぶ三津坂隧道は明治30年に竣工し、三津ホテルの開業は明治41年頃、オーナーは横浜山下町でホテル経営をしていたドイツ人のアドルフ・リヒターさんで、奥さんが三津の人だったといわれていることや内浦村の収入役を勤めた安田喜一氏の回想録にホテルの様子が記されていることが紹介されています。

その後、大正六年に重寺隧道と不二見隧道が完成すると交通の便がよくなったことから海水浴場のある久伏浜に安田屋、内浦館、松濤館が進出して観光地として賑わい始めたとされています。



写真には、ホテルの左側に丸太で組んだ櫓が写っています。久伏は建切網の漁場でもあり、左側の岬の山の背の松の大木には、幹の上方に小屋掛けがされ、魚見となっていました。この丸太の櫓も大峰を助けるホガヨミドであったかもしれません。後にここには看板のついた宣伝用の櫓が立っているところから、その後に宣伝用の櫓に転用されたのかもしれません。海水浴場の盛隆と漁場とは両立しなかったのでしょう。

資料館からのお知らせ

白隠禅画展を開催しました

今年も沼津御用邸記念公園を会場として開催された「松籟の宴2016」の展示部門として「白隠禅画展」を10月29日（土）から11月13日（日）まで、２階展示室を会場として開催しました。この16日間は休館日なしで開館しました。

今回も、東京新宿の田中温古堂さんの協力を得て開催したもので、今までの白隠禅画展では展示したことがなかった作品を展示することができました。特に「ねずみと大黒の正月」は墨一色の大幅で、迫力ある作品で大好評でした

白隠禅画展の様子

企画展「江梨歳時記」を開催します

平成28年度の企画展「江梨歳時記」を平成29年２月７日から５月７日までの３ヶ月間の予定で２階展示室において開催いたします。

西浦江梨に在住した２人の方により、昭和30年頃から平成８年にかけて撮影された江梨や大瀬の写真から定置網漁や蜜柑栽培の様子、葬祭など日常生活の様子といった海辺の村の生活の記録を紹介するものです。次第に失われていく、かつての村の生活を伝えてくれる貴重な写真を展示しています。ひと昔前の暮しに触れてみていただきたいと思います。

沼津市歴史民俗資料館だより

2016.12.25 発行　Vol.41　No.3（通巻212号）
編集･発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp

R70
古紙配合率70%再生紙を使用しています